

## 編集にあたって

## — 東京社会地図 —

大都市が空間的・社会的にいくつかの小宇宙からモザイク的に構成されていることは良く知られている。東京も、パリも、ロンドンも、ニューヨークも、それぞれ独自の個性をもっている。東京は墨田川の両岸に広がる。しかし東京の「川向こう」の概念は、パリの右岸、左岸の概念とは異なる。東京にも下町と呼ばれる地域があるが、それはニューヨークのダウン・タウンとはまったく性質の違う地域である。しかし同時に都市の中心部にはオフィス街、繁華街、そして卸商業地域からなる都心地域があること、この都心地域には郊外から多くの交通路線が集まり、日々住宅地から通勤者の大波が押し寄せること、この交通路線の結節点には副次的な商業中心が形成されることなど、大都市として共通のパターンを持っていることも事実である。現代の大都市の一般的な型、日本、ヨーロッパ、アメリカそれぞれの社会構造と文化の型、各都市固有の自然的条件や歴史的背景、これらの諸要素から規定されて、東京、パリ、ロンドン、ニューヨーク各都市の空間構造が形造られている。だからこそ大都市の空間構造は、大都市の一般的な型を求める研究者にも、社会や文化の特質を肌で感じようとする旅行者にも、興味のつきない対象なのである。

都市の地域構造のモデル化の最初の試みが、E. W. バージェスの同心円仮説であることは、良く知られている。シカゴ学派の諸研究は、各同心円地帯＝ゾーンが単なる空間的範域に止まらず社会構成や生活様式の面でも他のゾーンと区別される独自性を持つことを明かにし、空間構造と社会構造の相関性、同心円仮説の妥当性を証明したが、バージェス等の誤りは、彼等の同心円仮説が世界のすべての発展中の大都市に妥当すると主張した点にあった。また彼等は、比較都市的研究の基礎となるような、都市の空間的構成を記述するための標準化された手法を用意することができなかった。

社会地区分析や因子生態学など最近の諸研究は、まだ分析単位や分析方法の面で解決されねばならない問題が多く残されているが、標準化手法の確立に向けて大きな前進をもたらした。社会地区分析や因子生態学においては、因子や変数の析出に関心が集中し、本来の問題関心であった都市の空間構造のパターンおよびその類型比較への関心が見失なわれてしまった。このような方法論の迷路を脱して、本来の実質的問題関心へ立ち戻る必要がある。

そのために不可欠なことは、まず記述の重要性を再確認し、世界のさまざまな社会文化圏に属する諸都市について比較可能な方法で、すなわち標準化された手法に基づいて、空間的データを収集し、空間構造を記述することであろう。

このような目的のために私たちソーシャル・エリア研究会は、これまで約7年をかけて東京社会地図の作成に取り組んできた。東京社会地図は、分析単位として東京23区の約500メートル四方の緯度経度メッシュを採用した。これは東京について行政区画の変更にかかわらず時系列的な比較を可能にするだけでなく、国際的な比較の基礎となろう。東京23区の範囲には、2287のメッシュが含まれるが、これを対象に、国勢調査にもとづく人口学的データの他、土地利用や犯罪や投票率などの社会的なデータを含む広汎なデータに基づき総合的な分析を行った。さらに、パターン類似係数やクラスター分析などの新しい方法の開発によって空間分布上の特性にもとづいた地区分類を行ない、東京の空間構造の地図的な表示が可能になったのである。

この仕事は都市研究センターのプロジェクトによるものではないので、総合都市研究に発表せず別途刊行を予定しているが、センターのこれからの研究にもいくらかはお役に立つものと考えている。

さて本号は我々の都市的生活様式研究の前編である。神津島という孤島を対象に都市的生活様式の研

究をすることの意味は本論を参照されたい。我々としては、原点からこの問題に取りくんだつもりである。また本号には、本センター専任研究員第一号の石田教授による貴重な資料も収録されている。かれこれ併せてご利用いただければ幸いである。

倉 沢 進